

# 子どもを自らの学びに導く 教材開発の神髄を教えてくれた

新潟県 妙高市立新井小学校校長

西山義則

NISHIYAMA YOSHINORI

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で子どもを育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、西山校長が語る。



- 1976(昭和51)  
新採として  
松之山町立  
(現十日町市立)  
松里小学校に赴任



松里小学校に  
新採として赴任した  
当時の授業風景

- 1988(昭和63)  
上越教育大  
附属小学校に赴任

- 1994(平成6)  
十日町市立下条小学校に  
教頭として赴任

- 2000(平成12)  
羽茂町立(現佐渡市立)  
羽茂小学校に  
校長として赴任

- 2004(平成16)  
上越市教育委員会  
学校教育課副課長  
(後に課長)に着任

- 2008(平成20)  
上越市立春日小学校に  
赴任

- 2011(平成23)  
妙高市立新井小学校に  
赴任

にしやま・よしのり 専門教科は社会。長岡市立中島小学校、上越市立大町小学校、上越教育大附属小学校、上越市教育委員会学校教育課課長などを経て、2011年度から現職。

## 研究授業で出会った 「緑のダム」が私を変えた

驚き、感動し、発見することで子

どもは自ら学びに向かうのであり、そのための単元開発や教材研究が重要だ——。私は、小林毅夫先生の研究授業でそのことをさまざまと感じさせられました。

私は、中学時代の社会科教師に憧れて教師になりました。その先生の授業は、単に知識を与えるのではなく、生徒と先生が一緒に考え、つくり上げていくものでした。私はそうした授業をするには、子どもにとつ

て身近で、かつ教える価値のある題材を探すことが重要だと考え、新採の時からずっと教材研究に力を入れてきました。

しかし、30代になり授業も学級運営も一通り出来るようになると、「このままいいのか」と自問するようになつていきました。そんな時、上越教育大附属小学校から研究授業の案内が届き、「緑のダム、白いダム」という単元名に引かれ、小林先生の授業を参観したのです。

教室に入ると、教壇の横にある幅1メートルもある四角い水槽に、私の目は引き付けられました。中は泥や砂、

# 「発見や疑問を引き出す授業の大切さを伝えたい」



石が何層も重なり、表面はコケのようなもので覆われ、木が植えられ、端には蛇口が付いていました。ミニ山林が作られていたのです。

授業が始まると、先生はまず水槽にじょうろで水をたっぷりかけました。「何が起きたのか」と、子どもも参観者も皆、不思議に思いましたが何も起きません。そのまま授業は進みました。そして授業が終わる頃、蛇口から水がぽたぽたと落ち始めたのです。

現するという発想と、それを実際に作り上げた先生のエネルギー。自分の教材開発はまだまだあることを思い知らされました。それから、私は小林先生の授業に少しでも近付きたいと思い、何度も研究授業を参観したのです。

教材研究の重要性に改めて目覚め

い、谷川俊太郎の詩「生きる」を起點に「生きること」を考える活動を1年掛けて展開しました。

子どもから「生きるとは食べることだ」と意見が挙がったのを機に、畑を開墾して野菜を作り、収穫物だけで夏休みにサバイバルキャンプをしました。子どもが自ら火をおこし、器も土を焼いて作りました。また、「生きることは食べるだけではない。心が大切だ」と生き方に目を向けるようになると、子どもは自ら話を聞きたい人を探し、近所の人や障がいのある人などに生き方を尋ねに行きました。1年間、生きることに真剣に向き合い、最後の授業では一人ひとりが「生きる」というタイトルで詩を書けるようになつていました。子どもは自分が生きている意味を考え、自らその答えを追いかけるようになつっていたのです。

柳澤教頭の言葉と後押しがなければ

た頃、思い切った単元開発に挑戦できる機会が訪れました。当時の勤務校では、柳澤正喜教頭から「やりたいことを好きなようにやりなさい」と言われ、厳しくも、教師の思いを実現しやすい環境にありました。6学年担任だった私は学年で話し合

ば、私たちにはこのような授業はできませんでした。管理職の教師たちの信頼と懐の深さを思い知ったのです。

## 校長と自由に話せる雰囲気が学校を活性化させる

校長の今も、年数回は授業を行います。出張した先生の代理だったり、1単元を任せてもらつたりと授業時数はまちまちですが、教材は自分で作り、そのため地元の工場を見学したり、学校周辺の地図を見たりしていきます。授業は誰でも参観できます。出張した先生の代理だったり、1単元を任せてもらつたりと授業づくりに少しでも役立てればという思いと、校長の指導力を目標に、自分の授業に積極的に取り組んでほしいとも思うからです。

学校は校長1人でつくれるものではありません。目指す学校づくりを進めていくために、校長の考えを先生方が受け止め、意見を言い合える状況をつくること、そして、子どもたちの「?」と「!」をつくり出せる授業の大切さを伝え、先生方がやりたいことに自由に取り組めるよう支援することを、これからも大切にしたいと思います。